

よし、

一 軒のまどは、左やうじをはづしかけ、戸ばかりかけて置なり、其ためにかけて戸に色を付る事なり、

一 すみの時は、手そくいだして、ゆるりぶちの右のさきのすみに、ゑをさきへなして置なり、

一 茶の時は、たんけいを床の内へ入、左りの方に置なり、前の床ぶちより四目、左りのわきの地、さきより七寸五分に置なり、火口を前の方になしてよし、

一 茶立る時、手そくは水さしと中程の間に、えをさきへ火を前になして置なり、

一 茶の時は、手そく出して、水さしと中程の間に、釜の口も手前もよく見ゆる様に置物なり、茶出し候てより、手そく客より御こひ事本なり、えをさきへなし、ゆるりの右の方へいだすなり、

〔茶之湯六宗匠傳記〕古田織部殿自筆の寫

一 貴人珍客を夜會に申入事いかなり、夜は物事不自由なる物也、又は腹かげんもちがい、ごみほこりもみへざる物なればあしきと、常に紹鷗被申由略中

一 夜會の時、たんけひも、あんどどうも、客の取あつかふ事なし、懸物など見度時は、手燭を乞て見る、

古田織部正殿自筆の寫

夜會之事

一 夜會は心安き様にて、昔はむつかしき事など、申事も候、先ロジニ水ウタヌコトナリ、客ロヂ入候は、てい主アンドウにて出向ふ事也、則路地へ出す事、スキニ悪敷コト也、扱其アンドウ腰懸の上に置、てい主入コト、正座の人其アンドウヲ持候而ロヂ所々に氣を付、水鉢の本に置、手水つかい入なり、かこひの内は、タンケイニ火ヲトボシ置也、置所様々アリ、床の内クラキ勝手ナレバ、床ニモタンケイ置コト有、乍去掛物名物ナレバ置ヌコト也、手シヨク乞候而懸物ミルガヨシ、